

St. Luke's International University Repository

第34回聖路加看護大学セミナー:学術活動報告 (2002年度)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 郁子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/440

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



第34回聖路加看護大学セミナー

Evidence Based Nursing—看護実践へつなげるこれからの研究・教育—

2003年9月21日第34回聖路加看護大学セミナーを開催した。

本学セミナーは、看護学—実践・研究・教育—をめぐる先端的で国際的なテーマを選択し、大学の機能の一つである看護職者への生涯教育の一環として企画し開催している。

看護は、Evidence すなわち研究結果を根拠とした実践が強調されている。このことから昨年度は看護学—実践・研究・教育—において避けて通ることができない Evidence Based Nursing (EBN) の基本に焦点を当て開催し、好評であった。

今年度のセミナーも、EBN に焦点を当て、昨年度受講者からの意見・希望を活かし、根拠に基づいた看護実践へつなげる研究のあり方および研究成果をどのように批判的に読み看護実践に活かすか、さらにEBNに求められる能力育成のためのこれからの看護基礎教育、継続教育のあり方、臨床の場での研究結果の活用等に焦点を当てて企画した。昨年度のEBNをさらに発展させ、看護実践に活かす研究や教育のあり方を検討し、具現のすることをめざした。

400名を越す申し込みがあり、満席の会場は熱気にあふれ、EBNへの関心の高さを示した。

EBNに必要とされる技能（研究課題の形成、文献レビューと論文のクリティーク、統計に関する知識、結果を実践する戦略）に関しては、昨年引き続き、講師としてEBNに関する第一人者でもあるリンダ・ジョンストン準教授（オーストラリア、メルボルン大学、王立小児病院、看護実践研究センター）を招聘した。研究の基本である論文クリティーク能力育成プログラムの実際に関しては、数間恵子教授（東京大学）と宮下光令助手（東京大学）が講演された。また、聖路加国際病院 Pain Control Nurseである岡田美賀子さんは、がん疼痛緩和におけるEBNの困難性やEBN実践の具体事例をまじえて講演した。

EBNを育てる教育方法としてPBL (Problem-Based Learning) を中心にその目的と実際、今後の課題等を本学の森明子助教授が講演した。フォーラムでは意見交換が行われ最後にリンダ・ジョンストン準教授は「私たちはベストな看護を行う責務がある。そして信頼・trustを得る。その信頼の基となるのがevidence・根拠である」と結ばれた。

申込者数は424名、参加者数は390名であった。アンケート結果（回収率47.4%）は、回収率が低く、参考程度ではあるが、参加理由は、「テーマが良いから」が169件であった。回答者の92%が「内容が良かった」と答え、「新しい知見が得られた」96%、「今後実践に役立つ」98%と回答していた。数多くの自由記載には、今後の実践・研究・教育への取り組みへの示唆を得、学びが多かったこと、素晴らしい講師陣への感謝等が記載され、さらに今後のテーマに関する積極的な意見も多くあった。

（公開講座委員会委員長：岩井 郁子）